

# 4 課

10月24日

## 主の目 ——聖書の世界観



安息日午後 10月17日

### 暗唱聖句

どこにも主の目は注がれ／善人も悪人も見ておられる。(箴言 15：3、新共同訳)

主の目はどこにでもあって、悪人と善人とを見張っている。(箴言 15：3、口語訳)

### 今週の聖句

箴言 15：3、ヨブ記 12：7～10、エフェソ 6：12、黙 20：5、6、ヨハネ 1：1～14、マルコ 12：29～31

### 今週のテーマ

ポーランドの詩人チェスワフ・ミウォシュが一つの詩を作りましたが、それは(話をするウサギやリスといった)空想上の動物について書くことで始まっています。その空想上の動物たちに「本物の動物との共通点がある」ことは、「私たちが考える[空想上の]世界に実際の世界との共通点がある」ことと同様であると書きました。そして、その詩をこう締めくくっています。「このことをよく考えてみてください。そうすると身震いがしてきませんか」

「身震い」という言葉は、強烈すぎるかもしれませんが、確かに、人間がこの世界について考えることの多くは、まったく間違っているかもしれません。例えば、ほぼ2000年の間、この世の最も賢く、最高の教育を受けた人たちは、地球が宇宙の中心でじっと動かずにいると考えていました。今日では、最も賢く、最高の教育を受けた人の多くが、人間はもともと単純な生命体だったものから進化したと考えています。

私たち人間は、この世界を中立の立場から見ることはできません。私たちはいつも、自分の解釈や理解の仕方に影響を及ぼすフィルターを通してしか周囲の世界を見ることができないのです。そのフィルターは世界観と呼ばれるもので、私たちが聖書の世界観を青年たちに、また年配の教会員にさえ教えることは、とても重要です。

オックスフォード大学のある教授が、私たちの周囲にあるすべてのもの、私たち、この世界、そのどれもが現実のものではないという理論を立てました。それどころか私たちは、超高性能のコンピューターを用いた異星人によってデジタルに生み出されたものだというのです。それは興味深い理論ではあるものの、極めて重要な疑問を提起します——実在の本質とは何かという疑問です。

可能性のある答えは二つあります。一つは、宇宙（と、その中に存在するすべてのもの）は（人間も含めて）、ただ「ある」という答えです。誰かが作ったものではありません。神も神々もないし、神的なものは何もない。だれかが2500年前に言ったように（つまり、これは新しい考えではありません）、「原子と空虚」があるにすぎない……といった答えです。

もう一つの見方は、神的存在が宇宙を創造したというものです。確かに、この見方のほうが、宇宙はただ「ある」のであって、その説明はできないという考えよりも、ずっと論理的で、合理的で、理にかなっているように思えます。このような見解は、自然界、つまり「原子と空虚」の世界を包含しますが、そこに限定されません。この見解は、見えるものに限定しないで、見えないものをも含みます。

**問1** 次の聖句は、今日の研究で取り上げた2つの考えについて、何と述べていますか（詩編 53：2（口語訳 53：1）、箴 15：3、ヨハ 3：16、イザ 45：21、ルカ 1：26～35）。

いかなるキリスト教教育であれ、その中心となるのは、単に神が存在なさることではなく、その神が、私たちを愛し、私たちとかわってくださるような人格的な方であるということです。この方は、自然の法則を用いつつも、そのような法則によって縛られず、（処女がイエスを受胎したように）ご自分が望むときにその法則を超えることがおできになる奇跡の神です。このような観点からの教えは、とりわけ現代にふさわしいものです。なぜなら、知的世界の大半が、科学によって支持されていると（誤って）主張しつつ、無神論的自然主義的世界観を公然と悪びれることなく教えているからです。

聖書の世界観は自然界を包含しますが、そこだけに制限されません。対照的に、無神論的世界観はいかに狭く、限定的かということについて考えてください。結局のところ、聖書の世界観、有神論的世界観は、なぜ無神論的世界観より、はるかに論理的かつ合理的なのですか。

ドイツの思想家で著述家のゴットフリート・ヴィルヘルム・ライブニッツは、たぶん最も基本的かつ根本的と思われることを問いました——「なぜ何もないのではなく、何かがあるのか」と。

**問2** 次の聖句は、どのようにライブニッツの問いに答えていますか（創1：1、ヨハ1：1～4、出20：8～11、黙14：6、7、ヨブ12：7～10）。

聖書の中で、神の存在がいかに当然と見なされているかは、興味深いところです。創世記1：1は、神の存在を肯定する多くの論理的議論で（そういう議論はたくさんありますが）始まっていません。この聖句は、神の存在をごく当然なこととみなし（出3：13、14も参照）、聖書とその中に啓示されているすべての真理は、出発点から、神を創造主として説明しています。

創造の教理はまた、あらゆるキリスト教教育の基礎です。私たちがクリスチャンとして信じることは、みなすべて、6日間の創造の教理に基礎を置いています。聖書の始まりの言葉は、あがないに関するものでも、律法、十字架、復活、再臨に関するものでもありませんでした。

そうではなく、聖書は、創造主としての神に関する言葉で始まりました。なぜなら、先に挙げた教えのどれもが、私たちの創造主としての神の存在を切り離せば、まったく意味を成さないからです。

そういうわけで、改めて言いますが、聖書の世界観は、創造の教理の重要性を強調しなければなりません。このような強調は、非常に重要にもなっています。なぜなら、聖書の世界観を教えることが、科学の名の下に全面的な攻撃を受けているからです。進化論——命が数十億年かけて、突発的かつ偶然に、ゆっくり発達するという仮説——は、聖書に対する無数の人の信仰を破壊してきました。聖書とキリスト教信仰全般にとって、進化論以上に対極的な教えは思いつきません。ですから、進化論を何らかの形で聖書の創造の教理に調和させることができるという考えは、神の存在を認めない進化論よりも一層悪いのです。聖書とキリスト教信仰全体を踏みにじることなくして、それはできないからです。

神は私たちに、6日間の創造を覚えるために生活の七分の一（ほかの教えでは求めておられないもの）を毎週用いなさいと求めておられます。私たちはこのことから、創造の教理がキリスト教の世界観にとっていかに基本的なものであり、重要であるかということについて、何を学ぶべきですか。

「安息日午後」で述べたように、私たちのだれもがこの世界を中立の立場から見ていません。例えば、無神論者は空の虹を見て、自然現象以外の何物でもないと考えます。虹には、人間がそれに与えることにした意味がありません。その一方、聖書の世界観で虹を眺める人は、水と光の相互作用という自然現象だけでなく、この世界を二度と水で滅ぼすことはないという神の約束の再確認も見るのです（創9：13～16）。

「神は、このようにして、雲のなかに美しい虹をかけて、人間との契約のしるしにされたということは、あやまりやすい人々に対する神の何と大きな恵みと慈悲の表現であろう。……後の時代の子供たちが、天にかけられた美しい虹をながめて、その意味を聞くときに、親たちは、洪水の物語をして聞かせ、いと高き神が、水が再び地をおおうことがないしるしとして、虹を雲のなかにかけられたことを告げるのが神の目的であった」（『希望への光』54ページ、『人類のあけぼの』上巻107ページ）。

セブンスデー・アドベンチストにとって、聖書が私たちの信仰の基礎を成す文書であることに変わりはありません。この世界は、非常に手ごわく、複雑な場所になりえますが、聖書は、私たちがこの世界を眺め、理解するために用いるべき「フィルター」、つまり世界観を教えているのです。聖書は、私たちが自分自身の中に見出す現実——私たちがその一部であり、しばしばそれによって混乱、当惑させられるもの——をよりよく理解するうえで役に立つ世界観を生み出すのです。

**問3** 次の聖句の中には、私たちが存在している現実をよりよく理解するうえで役に立つどのような真理がありますか（エフェ6：12、マコ13：7、ロマ5：8、8：28、コヘ9：5、黙20：5、6）。

私たちはセブンスデー・アドベンチストとして、聖書の教えにしっかり従わなければなりません。なぜなら、これは、神が人間に啓示された真理であり、それ以外の方法では知ることも、理解することもできないこの世に関する多くのことを私たちに説明しているからです。それゆえ、あらゆるキリスト教教育は神の言葉に根差し、基づかなければなりませんし、それに反するどのような教えも拒絶されなければなりません。

人々が信じていることと相反する聖書の教えには、どのようなものがありますか。私たちはこの違いから、神の言葉を忠実に支持することがいかに重要であるかということについて、何を学ぶべきですか。

私たちの信仰にとって創造の教理は極めて重要ですが、この教理は、単独で登場することがありません。それはしばしば、あがないの教理と分かちがたく結びつけられています。なぜなら、率直に言って、この罪と死の墮落した世界において、創造だけでは十分でないからです。私たちは（だれもがそうであるように）生き、苦しみ、そのあとにどうなるでしょうか。私たちは死に、道端に放置された動物の死骸と何ら変わりなく最終的に終わるのです。何とひどいことでしょうか。

それゆえ、私たちには、世界観に重要なあがないの教理があるのです。私たちが信じるあらゆることの中心にはイエス・キリストが、それも十字架につけられ、復活されたキリストがおられるのです。

**問4** ヨハネ1：1～14を読んでください。これらの聖句は、イエスがどのような方であったか、私たちのためにどういうことを成し遂げてくださったかということについて、何を教えていますか。

第一天使の使命も見てください。「わたしはまた、別の天使が空高く飛ぶのを見た。この天使は、地上に住む人々、あらゆる国民、種族、言葉の違う民、民族に告げ知らせるために、永遠の福音を携えて来て、大声で言った。『神を畏れ、その栄光をたたえなさい。神の裁きの時が来たからである。天と地、海と水の源を創造した方を礼拝しなさい』」（黙14：6、7）。「永遠の福音」が創造主としての神に直接結びつけられていることに注目してください。そして、私たちが創造された神が、肉体を取って、私たちの罪のために自ら罰を受けてくださった方と同じ神であることを自覚するならば、私たちが彼を礼拝するように命じられていることは、まったく不思議ではありません。私たちの神がどのような方であるかを自覚するとき、私たちのなすべき応答は、ほかにあるでしょうか。

このような理由から、キリスト、それも十字架につけられたキリストが、私たちの教えるすべてのことの中心であり続けなければなりません。つまり、その教えには再臨も含まれなければなりません。なぜならキリストの初臨は、再臨を抜きにして、まったく役に立たないからです。キリストの初臨と再臨は、救済計画という一つの出来事の二つの部分である、と聖書から主張することができます。

「成ったもの」（ヨハ1：3）すべてを造られた方が、私たちのために十字架で亡くなられた方であるという、ヨハネ1章に書かれていることを、さらにじっくり考えてください。その方を礼拝することは、なぜごく自然な応答であるべきなのでしょう。

昔、フランスで、死刑に関する国民的議論が繰り広げられました——死刑は廃止すべきだろうか、と。廃止を支持する人たちは、有名な哲学者であり、著述家でもあったミシェル・フーコーと連絡を取り、彼らに代わって論説を書いてほしいと頼みました。しかし、フーコーが主張したのは、死刑の廃止だけでなく、刑務所制度をすっかり廃止し、囚人をすべて自由にすることにいうことでした。

なぜならフーコーにとって、道徳に関するあらゆる制度が人間の構築したものの、大衆を支配するために権力者たちが導入した人間の考えにすぎなかったからです。従って、このような道徳的規範には、真の正当性がないと、考えたのでした。

彼の見解は極端ですが、何千年も前にモーセも同じ問題の解決に直面しました。「あなたたちは、我々が今日、ここでそうしているように、それぞれ自分が正しいと見なすことを決して行ってはならない」（申12：8、さらに士師17：6、箴12：15も参照）。

しかし、もし私たちが自分で正しいとみなすことを行うべきでないとしたら、行うべきことをいったいどのように知るのでしょうか。その答えは、私たちを創造された主が、私たちの頼るべき道徳的規範をも与えてくださったということです。私たちの目は正しく理解できないかもしれませんが、神の目は常に正しく理解できます。

#### 問5 道徳的行為について、これらの聖句はどのようなことを教えていますか（申6：5、マコ12：29～31、黙14：12）。

もしあがないを私たちのキリスト教世界観の中心にしようとするのであれば、神の律法、つまり十戒がその中心でなければなりません。詰まるところ、人間のあがないが罪から、つまり律法を犯したことからでないとしたら（ロマ3：20）、私たちはいったい何からあがなわれるのでしょうか。福音は、神の律法を抜きにして、まったく意味を成しません。そのことが、律法は私たちを救う力がないにもかかわらず、依然として私たちにとって拘束力があるとわかる一つの理由なのです（だから、私たちは福音を必要としています）。

それゆえ、あらゆるセブンスデー・アドベンチストの教育は、エレン・G・ホワイトが「律法の永続性」（『希望への光』1618ページ、『各時代の争闘』上巻62ページほか）と呼んだものを強調しなければなりません。その律法には安息日も含まれています。もし教育が現世において神のかたちを私たちの中に回復することであるなら、最も基本的なレベルであっても、キリストの模範を踏まえて、神の律法が、神の目に真に正しいことを示す道徳的規範として堅持されなければなりません。

「教育の真の目的は、魂のうちに神のみかたちを回復することである」（『希望への光』311 ページ、『人類のあけぼの』下巻 258 ページ）。この考えを念頭に置くことで、なぜアドベンチストの教育には、しっかりしたキリスト教の世界観が必要であるのかがわかります。人間は、高等教育においても、聖書の中に見いだされる原則に矛盾する考えや態度で教育されえます。それゆえ、セブンスデー・アドベンチストとして、私たちの教育制度は、キリスト教の世界観に基づいていなければなりません。そしてこれは、教育のあらゆる一般的な領域、つまり科学、歴史、倫理、文化といったものが、そのような観点から教えられることを意味します。それを否定し、無視さえする観点に対抗するものとしてです。私たちは、あらゆる生命、あらゆる現実を、自分の世界観というフィルターを通して見ます。その世界観が人を説得できるほど系統的に考え抜かれたものであろうとなかろうとです。従って、聖書の世界観があらゆるセブンスデー・アドベンチストの教育の基礎となることが不可欠です。

### 話し合いのための質問

- ① 教育制度全体が非常に有害であった（ある）歴史から、あなたはどのような実例を思い浮かべることができますか。その場所はどこでしたか。生徒たちはそこで何を教えられましたか。それらの実例から、何を学ぶことができますか。どうしたらこういった有害な影響から私たちの教育制度を守ることができるでしょうか。
- ② 今週の研究では、キリスト教の世界観のいくつかの重要な点（神の存在、創造、聖書、あがないの計画、神の律法）に目を向けました。キリスト教の世界観を系統的にすべて記述するなら、そこにはどんな重要な要素が含まれるべきですか。
- ③ ある 18 世紀の思想家が、かつてこう記しました。「良心！ 良心！ 崇高な本能、不滅にして天より来たる声、無知で愚かではあるが知性をそなえた自由な存在をまちがいなく導く道案内、人間を神に似たものにする、善悪の絶対確実な判断者」（ジャン・ジャック・ルソー『世界の名著 30』中央公論社 491 ページ）。この見解のどこが正しいですか。どこが間違っていますか。
- ④ エレン・G・ホワイトの次の言葉に、もう一度目を向けてください——「教育の真の目的は、魂のうちに神のみかたちを回復することである」。これはどういう意味ですか。この言葉は、アドベンチストの教育が、教育に対するこの世の多くの見方とは異なるものでなければならない理由を、いかに示していますか。